
本音・建前・妥協と恋愛

三つ木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本音・建前・妥協と恋愛

【Zコード】

N4032BA

【作者名】

三つ木

【あらすじ】

学校という「マミヨニティ」の中、閉じた輪の中で起くるもうもろ。
友達という束縛、恋愛という勘違い、変人である対価、周りと違う恐怖、価値観がちがう意味、それらを乗り越え、又は粉碎し、妥協し、迎合し、目的地を決めながらもこっちへフラフラ、あっちへフラフラ、時に目的地すら妥協しながら進んでいくお話を

だつたらしいね。

第一話 ある日の前（前書き）

はじめまして。はじめて書くのでみなさん全員はじめましてで間違いないはずです。

はじめて書きます、今までこんな風に書く遊びすらしたことない人間です。この話は自分の衝動で書いています。なので「あつ、こんな考えのキャラいたな」とか「しゃべり方が何となく似てる・・・」とかがあるかもしれません。

なのでこれはダメだと思ったら感想なりで言って頂いてかまいません。つていうか言ってくださいお願いします。

第1話 ある日の前

「…………わかるねえよ

「…………わかるわけねえだろ」「

「…………例ええ！それがあ！自分自身のことだらうがあ
あ！幾ら考えようがわからねえんだよおおおお！！！なのにいい！
他人の事？んなもんわかるわけねえだらうがああああああああ！！！
！！！！！」

「…………だから俺は、他人の事なんて考えねえ。そんな他人のつま
らねえ事情に、一々拘つてやるつもりなんだ」

「…………ねえんだからよおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおお…………！」

これは本音。正真正銘間違いなく本音だ。ブチ切れて溢れ出た本音
の発露。

流れ出たものはもう戻らない。ただ広がっていくのみ。

覆水盆に返らず。

・・・痛い。

ああ、痛いな。なんだこれは。後頭部を衝撃が襲つた。

瞑つていた目を開けると暗闇だった。うつすらと入つてくる光を頬
りに眼球を動かし周りを見ると、何か大きいものがすぐ目の前にあ
ることが分かる。

これはなんですか？これは机です。

・・・・・あまりの熟睡っぷりに、ついつい英語の教科書みたい
な回答が出てきたようだ。ああ、ならさつき俺の後頭部を襲つた衝
撃は・・・・

「お前、さつきの授業でも寝てたる。どんだけ寝れば満足するん
だ？」

ん？先生はなにやら酷い誤解をしているようだ。間違いは間違いと
素直に教えてあげるのもまた、生徒の役割だろ。

体を起こし、口を開き、聞くに堪えない言い訳がこぼれ出る。

「いやそれは違いますよ先生。むしろ逆です、俺は極力眠りたくない
んですね。だって、もつたにならないですか？眠ついたら何も分
からない、前後不覚とかそんなレベルじゃなくて、なにも感じるこ
ともないなんて、もつたない。」

「いやいや寝てたじやん。熟睡だつたじやん。しかも一時間、ふつ続
けで」

「それはあれですよ、三時四時くらいこまで起きてると毎回元気気がね」

「結局寝てたら回りだらうが。まあ、一時間分は充眠？したんだから、あの時間ぐらいは起きたりよ」

加藤先生が教壇のほうへ歩いていく。もう一人寝ていたやつがいたらしい。そいつも行きがけの駄賃とばかりに教科書で覚醒させられていた。

「こつも思つんだが、このじ時勢に、軽いとはいえ暴力を振るう教師つてのもすげよな」

「たしかに」

「しかも男女問わずだぜ、男女平等とかいつての世の中だけどなかなかできないよ」

「たしかに」

「まあ俺の隣には授業中に二時間寝続けたつづー猛者もおられるみたいだが」

「マジでかーー時間の睡眠しか出来なかつた俺なんかまだまだつてことなのかな」

「…………」

「スマセン、はい私です」

弱いなー俺。はい、本当は三時間も惰眠を貪つておりました。
ちなみに話しかけてきたのは隣の席の捨鉢活機君、十六歳。八坂高校2年C組、主席番号・・・はわからないがなんとサッカー部のエース

の良き相棒だ。つまりエースほどの上手ではないけど他の部員よりは上手く、エース君（仮）と現時点で一番上手く会わせられると、そういうわけで。

「お前、沈黙のプレッシャー？」弱いなあ。いつもながら

「あの間がダメなんだよ。あの間が俺の良心を責めたてるんだよ

「んなもんあんのか？」

「はい、あります。すっげーのが。特注品のオーダーメイドが」

「…………」

「スマセン、ありません、欠片も、微塵たりともございません。あと言葉の意味が被つてしましました。もうしわけございません」

「オホン、話を戻すけど三時四時まで起きてなにしてんだ?」

「んーなんもしない」

「は?」

「いやだから、特別起きてなんかしてるってんじゃないくて、もう何度も読んだ本を読み直したり、深夜ドラマを見たり、ああたまにテレビショッピングも見たりと脈絡なく田的もなこのを」

「いやいやいや、んー、ふーん、はー、そつかそつか、なるほどな。2年になつて、隣の席になつて、喋つて、知り合つて、まだ1ヶ月も経つてないが・・・・間違いないと断言できぬよ。」

「お前は変人だ」

「知ってるよ。多分・・・」

第2話 むる口（複数形）

れあれあれど、今まで続くのか私にもわかりません

第2話 ある日

今日は素晴らしい日だ。ああそりだ途轍もなくすばらしー。休みだ、休日だ、自由だ、パラダイスだ。

しかも今日はゴールデンウィーク初日ー明日も明後日もそのまた次の日までも自由が保障されている。まあそのさらに次の日はバイトがあることが保障されているのだが。

捨鉢のやつなんかは「昼まで寝倒すに決まつてんだろーが…」とほざいていらっしゃつたが。もつたいない。

第1話でも言つてたと思うが俺は寝るのが嫌いだ。ああもつたいない、なにか出来るだらうとの間で。なにかを読めるだらう、見れるだらう、感じれるだらう、自慰に浸つたつていいだらう。意味あることをする必要はない、形に残るものを作る必要もない、勉強しようとなどと口が裂けても言ひはしない。寝るといふことがただただ無為に感じてしまつといつ、本当にそれだけの話だ。寝るなんてそれは死んでると同じだ。まあ「疲れがとれたり、精神的にも安らぐし、生きるのに不可欠なのだからむしろ、一番生きてるといえるんじやないか」と反論されればいともたやすくこの口は閉口してしまつが。

・・・喋つではないからな。この閉口はなんていうかナレーションみたいなもんだから。脳内で垂れ流しているド恥ずかしい妄想の一種みたいなもんだからね。だから俺は街中で一人で空に向かつて話しかけている不審者ではないのであしからず。まあ街中でこんな妄想をしているのだとしたら、それはそれで十分不審者の素質があるんだろう。・・・周りから見て分かるかは別問題だが。

「……………」

チラツ

悩みはじめてもうも45分も経っている。そろそろ決めないとな・・・

今こるのはナレーションでも言つてた通り街中、さらに詳しく表現すると店の中、さらに詳しく・・・しつこい・・・スマセン、家具を買いに来ています。もつたいくつてすいません。

家具・・・そう枕を買いに来ている。家の近所には小さくてしょっぱい感じの店しかなく俺の購入欲を刺激しなかつた。が、羽毛が飛び始めている枕をつかうのも限界だつたようで、朝起きたら羽毛に埋もれていた（誇張表現あり）

てなわけで購入のため電車に乗つて大型家具店へ馳せ参じたしだいでござります。

正直舐めてたわ、枕を舐めてました。シーツの柄や肌触りはまあ分かつてたとはいえ問題は中身、羽毛だのポリエチレン、ポリエステルさらには2種混合とかまである。そりや時間がかかるや、悩みに悩むぞ。とはいえさすがに店員の視線が気になつてきた。いやたぶん、迷惑だとか不審なやつだなとか思つてないんだろうが思つてるのかなと想像する・・・でも思つてないかもしないし・・・

まつじうでもいいか。

そりに30分後枕とシーツを購入し俺は店を出た。

予定より時間を使つてしまつたため午後の2時になつてしまつた。昼飯もまだだ。でも・・・大丈夫だ、問題ない。なぜなら自由だからだ。今日この日24時間は俺の自由だ、俺が俺のために使える俺の時間だ。だから昼飯が2時になるうが3時にならうが俺が問題ないと判断すればそれは問題ないのだ。なぜなら自由だから!!!!!(ビバ自由!!!!!(ビバの用法あつてんのか?まあいいか)

というわけで駅の近くにあるM印のファーストフードへ今向かっているところだ。この駅は結構でかい駅で、周りにもショッピング街が立ち並んでおりゴールデンウイーク初日ということもあってか結構な賑わいを見せていた。

それらのショップを横目に見ながら目的地へと俺は進んでいた。冷やかしたいという気持ちもあるにはあるのだが、いかんせんこの枕君が邪魔だ。歩くのにもすでに邪魔だし、こんなもんもつてあの人ごみに行きたいとはとてもじゃないが思えなかつた。

M印は生憎と満席だつたため持ち帰りにしてもらい、公園で食べるためには移動中だ・・・なんかさつきから移動中が多いな。まあ俺がM印の中でレジの順番待つたり、注文したりを描写してもシユールに過ぎるだろうが。なんとなく今へシユールストレミングつて単語が浮かんだ・・・なんだっけ?

M印を食べ終わり、まだ残っていたジュースをズーコーやりつつ歩いているとなにやら空気が変だ。ガヤガヤと見物人たちが何事を囁きあつており、ちょっと悩んだが、なんとはなしに覗いてみることにした。

この判断が所謂ターニングポイントとやらなのだろう。俺は無神論者で「神も仏も蹴つ飛ばせ」を地でいつているため縁のない言葉なのだが、正にこういふのを、阿呆どもが口をそろえて言つのだろう。
・・・・・運命と。

男が5人いた。

女が1人いた。

男5人が女を囲んでいた。

つまり・・・・女が性が悪い男に絡まれている。

「チエ、つまんねえな」

ありがちだ。どこかのマンガ・ドラマ・小説でよく見る展開だ。

新鮮味がない。面白みがない。緊張感がない。

なんかこう酔っ払いがあわや転落死？！とか、「助けて下さい！」と世界の中心で愛を叫ぶ？！とかそんなわくわくさせるショチュエーションを期待したのに・・・これが、まあ両方とも不謹慎極まりないが。

でもこれは真理ではないだろうか？面白いものが見たいという欲求はどどのつまり刺激がほしいということではないだろうか。その刺激が赤ん坊のほほえましい姿が映つているホームビデオなのか、人の死という禁忌に関する事柄なのか。結局はこの違いではないのか。そこに苦い・辛い・甘いと個人の趣味趣向が入り混じるが大別するト、+と-の2極になるのでは？

ただ死は怖い恐ろしい。俺だってもちろん怖い。でもだからこそ刺激としては最高級の質を持っているのではないか？

問題なのは-の刺激でも楽しめるかどうか、自分の糧に出来るのかという点だろう。

これは酒だ。酒と同じだ。アルコールを摂取し楽しめるか否か、これに似ている。俺は飲めない、飲むとしんどくなつて動かなくなる。あと目が据わつて怖いとも言われた。こういう人は酒を飲んでも楽しめない。それと同じだ。

-刺激に対する耐性を持たないものからすれば不謹慎など百害あって一利なし、なんだろうが不謹慎な事柄が無くならないのは-刺激の耐性を持つものも少なからずいるという証明ではないだろうか。

・の刺激に対しても気持ちよく酔えるか？乗れるか？それはおそらく素質・環境・慣れで増減するのだろう。まるでアルコールと同じだ。

まあ、本筋の流れとはまつまつまつまつたく関係ないが。ただの馴文だ。

今回の騒動、まああえて見所を上げるとするなら。現実なんていう世知辛い所にも、窮地に駆けつけてくれる王子様なんていいるのか？つてどこかな。

よくよく男たちを見てみると・・・全員17くらいか？正直見た目で歳なんかわからんねえよ。厳しいし。まあ高校生なんだろうなってことはわかる・・・なんとなくだが。

女のほうは・・・・

「おおーマジでめっちゃキレーな子じゃんか」

あつ、男一人追加入りました

1対6か厳しいな。ブチのめすなら王子様3人もしくは武術の達人

王子がいるなあ。・・・なんかハンチ王子みたいだな。

で、女のほうは・・・あれはウチの高校のヤツだ!!しかも知ってるヤツだ!!!

とはいえたから一方的に知っているだけだが。どえりやー美人で入学当初から色々と話題になった。おれもあの子の教室まで顔を見に行つたから覚えている。クールぶついているバイトの先輩と捨鉢の3人で見に行つたつけか。かわいいよりは美人さんだったな。だいぶ俺たちの話のネタにもなったな。2年になつて髪型を変えて人気が再燃したあの・・・あの・・・あの・・・名前まで知つてるとは言つてないだろ。

見に行つただけだつたし。見たかつたと、知り合いになりたかつたは全然違う。まあどちらも、あちらさんの迷惑であろうことは想像に難くなかったが。

ジロジロとだいぶ不躾な感じで女を・・・女の子を見ていたが、ふと目が合つた。困惑した顔というよりも無表情で従わない、言うことなんぞ聞いてたまるかという意思が言葉なくとも伝わってきた。

ああ、なるほどなと得心が行つた。なんで男が1人追加発注されたのかわからなかつたがそういうことか。

5人でダメならもつと増やせばいいじゃない。

と、まあそういうことなのだろう。頭悪いし、女の子1人に対して情けねえなとも思ったが、あの無表情を前にすると応援を呼びたくなるのも理解できなくもない。美人だからか迫力がすごい。まだからといって情けないのはどうしようもないが。

ただ、これは効果的だろう。5人ならまだ視界は開けているだろうが8や9人きたらこれはもうどうしようもない。視界が奪われれば恐怖は一気に倍加しそうな気がする。されたことないから想像だが。単純に逃げにくくなるしね。

ん？美人Aがこっちを見続けてるような・・・・フウ・・・・。
しかたないな

(ガ・ン・バ・レ) b

ナイス応援だ俺！ナイスサムズアップ！！

いやー、つまんなかったから、ついからかっちゃった！

そろそろ帰るか。
潮時だ。

そつ踵を返して1歩2歩と歩き圧したときだった。

「アーティストの才能を発揮するためには、アーティスト自身が何をやるかよりも、アーティストの周囲の人間たちが何をするかの方が重要だ。」

「アヤシイ奴だ。」

か
sk1djk1さ.jかjkあ.jかj

ん？いきなり騒々しくなったな。

何がしたいんだろう俺は。

なんとあの美人Aが喚いていた、大声で。なんとまああの美人Aが叫ぶとは、いつたいなにが？

深呼吸して、耳を澄まして・・・・・

「……うけなさこよ。せりき……………何つ無視し
て…………」

「…………」

「おー……u校の生徒でしょ……早く……」

あ、やつぱりか。原因は俺か。さっさからかったのが良くなかつたのかな。ていうか同じじ高校だと個人情報の共倒れは勘弁してくれよ。てかよく分かつたな高校同じって。まあ同じ高校、同じ学年なら顔くらい覚え合っても不思議じゃないか。

「あのー……知り合いなら助けたほうが……」

いやいやいやいや、おばちやーん！なに戯けたこと抜かしてんだおばちやーん！……！

あー、でもたしかに一応知り合いか。まあ、無関係以上知り合い未満の拙すぎる関係だけど。

第2話 ある日（後書き）

本編中の駄文は完全にノリで書いてます。
だから矛盾もあるだらつこ、ネタもすぐ汲むとおもいます。
なので無くなつても「ああ、ネタが戻きたか」と思つといへください。

読んでいただきありがとひばりこました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4032ba/>

本音・建前・妥協と恋愛

2012年1月10日22時47分発行